

「靈異記」の応報思想

入部正純

平安朝初期に成立した仏教説話集『靈異記』は、大陸伝来の仏教が、その移入初期にあってわが国一般民衆にどのように受容されたのかという実態を我々に示してくれる。かつて私は、本集の諸仮菩薩に対する信仰や説話上の僧尼の性格などを考察し、靈異記に現われた初期仏教信仰の一・二の特質を述べたつもりであるが（拙稿「靈異記の仏菩薩信仰」『文学・語学』第五十四号。「靈異記に現われた僧尼」『仏教文学研究』第十集。）、ここでは更に、本集の因果思想に注目して、この方面的の考察を若干すすめてみたい。

善惡の因果応報の理は、いうまでもなく靈異記を貫く中心思想である。

善惡の報は影の形に随ふが如く、苦樂の響は谷の音に応ふる
が如し。云々（上巻序文）

靈異記において因果の道理は何人も疑いをさしはさめ得ない大前提として説かれる。撰者景戒が各因果譚の後に、様々の經論を引用して付した類型的評文は、經典に説かれた因果の法則が現にかく行われたとの一々の検証であった。靈異記の先行文献をなす中國の冥報記（七世紀中頃成立）は、その序文でまず仏教の因果説への反論（自然説、滅盡説・無報説）をあげている。撰者唐臨は

それら各説への反駁を通して因果を強調しているが、中国に因果思想が浸透するには一部にそれ相当の思想的な抵抗のあったことが知られる。一方、靈異記は因果不信の徒は多く語られても、それが論理的積極的な抵抗があつたことはほとんど窺えない。景戒は、しばしば、因果譚を「これ奇異しき事なり」といった感嘆的文句で結ぶ。そこには、一方で厳しく因果を説く仏教者の口吻と一種背反するものが感じられる。「景戒は應々にして仏教を説く事を忘れ、奇事そのものに興味の中心が傾いている」とか、更に「撰者に様々の奇瑞譚を集めさせた眞の動機は巷間の奇話そのもののへの好奇心であろう。」とまで述べられる「因がここにある」が、翻つて考えると、靈異記に語られる因果の道理は、私度僧出身の景戒や上代庶民が自らの思想・精神内で体験的に感得したものとはいまい。因果はむしろ、道理としての認識以前の未知の或る不思議な力であり、輪廻転生説などの導入とあいまって神秘性が付加されながら受容されていったのではないか。人々はそしてその因果の力に対し「信け恐れる」のである。それは素朴な因果認識であるが、冥報記などと比較する時、仏教の因果律はわが国には抵抗なく移入されたものによじである。

靈異記に説く善惡の応報は本来の書名に示す如く、特に現報が中心である。冥報記序によれば、応報には、現在の身にただちに善惡の報を受ける現報、諸業に随つて地獄・餓鬼などの諸道に生まれる生報、次生のみならず五生十生のうちに至つて報を受ける後報の三種があると説く。靈異記の現報中心主義は、三世の思想が未発達の段階では普通のあり方であろうし、上代人に受け入れ

やすいいものであつたろう。しかし、元來仏教的因果律が過去世・未來世にかかわる以上、靈異記のそれも現世のみにとどまるものではない。後世、一般文芸にも根強く浸透した、生前からの因縁——宿業思想が當時すでにかなりみられるなどは、まず注意されてもよい。

宿業の招す所にしてただ現報のみにあらじ。徒に空しく飢ゑ死なむよりは、善を行ひ念ぜむには如かじ。(下11。上8、下34などにも類文あり)

これは病苦や貧苦を自らの宿世の業と反省し、業報が後世に及ばないよう、善を修め、その罪障を消滅しようとするのである。ところで、この宿業思想がもとになった一群の宿報譚がある。一人

の美しい娘が悪鬼に魅入られとり殺されたという巷間の俗説に於て、撰者は「或るは神怪なりといひ、或るは鬼啖なりといふ。覆りて思ふに、なほ是過去の怨なり」と述べているが(中33)、たとえば、中巻三十、同四十、下巻一などはすべて、ある人が前生で何らかの怨を結び、その怨を現世ではらされるという内容である。靈異記では宿世の業による応報が、その実質は返怨とか復讐

シェーリングにおける「惡」

——特に自然の概念を中心にして——

堀 尾 孟

では未だ十分に深化していない、より現実主義的なものの考え方でうけとられている、ということであろう。靈異記では、恩に報いるべきことをしきりに説くが、それもまた善因善果ということと結びつけて、庶民にうけ入れやすい内容であったと思われる。ただ、たとえば积智光が地獄の炎火に焼かれる個所に「極めて熱く悩しけれども、心に近づかむと欲ふ」とか「心に悪めども、なほ就きて抱かむと欲ふ」などという描写がみられ、ここには自らの業に引かれるという仏教的業報觀の本質的なものが、かなり的確にとらえられているのであって、上代人の仏教思想に対する敏感な反応をも、断片的ながら読みとることができるのである。

とかいったかなり直接的具体的なやり方で説かれるのが普通である。そしてかようなことがまた、宗教的世界であるはずの地獄における業報の様相にも現われている。たとえば、生前殺生したり人を害した者が、地獄に堕ちて直接その畜類や被害者に責めざなまれるといった類の話が数例みえるが、地獄の業苦もいゝではかなり現世的次元で考えられているのである。

以上、靈異記の応報觀についていえることは、それが思想とし

悪は人間の主体の問題である故に、これを問題にする場或は視点そのものが必ず問題であるが、今はそれを別の問題として、悪を自然(Natur)から見てみる。しかしあリングに限つても自然は甚々広義な概念であるから、所謂彼の『自由論』の中で、「我性が精神をもつて」(die Selbstheit hat den Geist)とか「精神的となつた我性(die geistig gewordene Selbstheit)」と言わる悪の成立過程、即ち自由を有せる存在者・人間の存在構造と